



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルクセンブルク語の音韻記述 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	西出, 佳代
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11177号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55613
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kayo_Nishide_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士 (文学)

氏名： 西 出 佳 代

	主査	教授	清 水	誠
審査委員	副査	准教授	藤 田	健
	副査	教授	山 田	貞 三

学位論文題名

ルクセンブルク語の音韻記述

1984 年の言語法によって社会的にルクセンブルク大公国の国語の地位に昇格したことに伴い、ルクセンブルク語の言語擁護と言語教育は、近年、政府の財政的支援を受けて積極的に行われている。しかし、19 世紀以来の方言研究の伝統はあるものの、現代言語学の方法を用いた分析は近年になってようやく行われ始めた観が強い。同言語の音韻記述については、現地の母語話者研究者を中心に社会言語学的考察や個々の現象の分析はなされつつあるが、音韻全体の体系的記述は意外なほど不十分と言える。中小の言語一般に共通して、ルクセンブルク語には十分な発音辞典が存在しないが、発音表記を掲載している辞典の記述にも、精密さや一貫性の欠如が散見される。文法書の発音と発音規則の記述にも、問題点と思われる箇所が少なくない。本論文は、西出氏の 2 年間余りのルクセンブルク大学留学とその後の研究滞在の間、複数のインフォーマントの協力による現地調査を通じて、新しく誕生したこの西ゲルマン語の研究の不備を補い、従来の記述に代わる新しい分析結果を随所で提案している。また、通時的な考察についても、従来の日本のゲルマニスティクではほとんど言及されることがなかった現象をめぐって、本格的な紹介と言語学的考察を行っている。

本論文の成果の意義は、第一に、信頼すべき複数のインフォーマントを対象とした現地調査を通じて広くデータを収集し、最新の音声解析ソフトを駆使して実験音声学的な根拠を与えながら、ルクセンブルク語の音韻構造について独自の視点から新しい体系的分析を行った点に求められる。個々の母音と子音の解釈をめぐって、精密な発音表記を提案し、従来のルクセンブルク語の音韻記述の不備を随所で指摘した箇所は、本論文の独創性を物語っている。また、共時的音韻規則の解釈についても、代表的な文法書の記述の不備を正し、必要に応じて形態論的・統語論的視点も援用しながら、現代言語学的に一貫性のある分析を行っている点でもすぐれている。さらに、通時的音韻変化の考察でも、現地調査を通じてかつての音韻現象の残存を確認するなど、たんなる思弁的解釈に終始しない周到で

実践的な研究姿勢がうかがわれる。

西出氏は設立後間もないルクセンブルク大学のルクセンブルク語学科に長期間留学した最初の日本人研究者であり、日本人として初めてルクセンブルク語で書かれた論文を発表し、インフォーマント調査はすべてルクセンブルク語で行ってインフォーマントの信頼を得るなど、ルクセンブルク語の高い運用能力を身につけている。また、フランス語およびドイツ語が優勢なルクセンブルク語の擁護・教育の状況にあって、両言語を駆使して研究文献を的確にフォローしている点も、研究者としての資質を証明している。

本論文は、20 世紀後半に誕生したこの新しいゲルマン語について、周到な現地調査と最新の音声解析方法を駆使しつつ、同言語の音韻構造を独自の主張に基づいて体系化し、従来の音韻記述の不備を随所で指摘して、共時的・通時的考察を交えながら内容的に深化させたすぐれた論考と言える。これまで日本人としてだれも取り組んだことのないルクセンブルク語について、高度な言語的運用能力を身につけ、ドイツ語とフランス語にも精通し、実験音声学、理論言語学、歴史言語学の3分野の確かな理解に立脚している点で、高く評価できる。ただし、音声解析のデータがどこまで抽象的な音韻分析に適用可能かという点については、主観性を完全に排除することは困難であり、本論文でも部分的に反論の余地がないわけではない。また、一部の音韻分析での不注意による不備、発音記号における若干の誤植、表現的に不明瞭な箇所など、改善を要する点も認められる。しかしながら、外国人研究者がきわめて乏しいルクセンブルク語研究において、同言語の高度の知識を背景に、独自性を主張し得る成果を挙げたという意味で、本論文は十分にパイオニア的な意義を有している。日本のゲルマニスティクにたいする寄与も、きわめて大きいと判断される。以上の審査の結果、当審査委員会は全員一致して、本論文が博士 (文学) の授与にふさわしい学問的水準にあるとの見解に達した。